

# ミレトスのアナクシマンドロス

—その断片 DK. 12 B 1 について—

箕 浦 恵 了

## 一

アナクシマンドロスは「第五八オリンピア年紀の第二年(547/6 B.C.)には六四歳であり、そしてまもなく歿した」<sup>①</sup>、と伝えられている。アナクシマンドロスの生きた紀元前六世紀イオニアのミレトスは自然哲学(*nepi φύσεως ἀπορία*)の誕生の地であり、知的・技術的革新の舞台であった。この市の人であり、タレスの弟子であったこの哲学者は、多方面にわたる非凡な才能によつて、ミレトス市民のために貢献したのであつた。かれは黒海沿岸のアポロニアへの植民遠征を指導し、最初に世界地図を制作し、また天球儀を作成した<sup>②</sup>、と伝えられている。またグノーモン「その影

が太陽の方向と高さとを示す、いわゆる日時計の示影針」をバビロニア人から学んで、ギリシャ人に伝えたのもかれの功績の一つである、と考えられている。<sup>③</sup> このような業績の故に、当時ミレトスの市民たちはアナクシマンドロスの記念像を建立したのであろう。ミレトスでの発掘により発見された、上部の欠けた一彫像に、'Αὐτοῦ μνημόνιον' の文字が見られるが、この彫像はミレトスの市民に貢献するところ大であったこの哲学者の記念像としてのみ考えられるのである。<sup>④</sup>

かれの技術的、実際的活動による貢献はかように大きかつたが、しかし他面アナクシマンドロスは、その限りでは、タレスの仕事を継承し發展させたにすぎないとも考え

られるであろう。かれがタレスを超え、その天才を發揮したのは、むしろかれの宇宙論的規模を持った哲学的思惟においてであった、と思われる。かれはその思惟を書物に書いた、<sup>(⑤)</sup>と言われる。その文体は、現存する若干の断片的語句に関して、「やや詩的な言辞」<sup>(⑥)</sup>と言われているけれども、しかしそれは従来のホメロスやヘンオドスの詩とは異つた新しい表現形式のものであった。

アナクシマンドロスの名前は、かれの「忘れ得ぬ精神的相貌」(ヤスペース)によつて、紀元前六世紀のイオニアにおいては畏敬の念をもつて語られたであろう、と思われる。だがしかし、その後かれの名はまるで忘れ去られてしまつたかのようで、その名が再び記録にあらわれたのはようやくアリストテレスやテオプラストスの時代になつてからであった。

スイダスの記述によれば、アナクシマンドロスは「自然について書いた」という表題の書物を書いたというこれが「自然について」という表題の書物を書いたということではないであろう。ディオゲネス・ラエルティオスの報告によれば、「かれはかれの学説の概要的論述を行つていたのであり、恐らくその論述にアテナイ人アポロドロスも偶々出会つたのであろう」と言われている。もしその通

りだとすれば、報告されているアナクシマンドロスの書物は、かれの学説が詳述されているような、整つた形の書物であったのではなく、これは始めからごく簡略な、学説の概要の如きものであつたとも考えられるのである。また、その著作にアポロドロスも「偶々出会つた」と語られていることからみれば、アポロドロスの時代「紀元前二世紀」には、アナクシマンドロスのこの手短な著作もすでに余程の稀観本になつていたのではないかと思われる。或はむしろ、アナクシマンドロスやアナクシメネスの著作は、アリストテレスの時代にはすでに失われていたのであるが、アリストテレスは自分の問題の歴史的様相への関心から、これら二人のミレトスの哲学者たちの著作を探し求めて、その写本を発見したのであろう、とジゴン(Gigon, O.)の如く考へるべきかも知れない。<sup>(⑦)</sup>しかしその写本は再び散佚してしまつた。アリストテレスの注釈家シンプリキオス「六世紀」やその他学説誌家の注意が再びアナクシマンドロスに向けられたときには、かれらの手許にアナクシマンドロスの書物はもはやなかつた。シンプリキオスらの手許にあつたのは、テオプラストスの『自然学者たちの諸教説』(*Φυσικῶν δόξαι*)であった。しかるにテオプラストスのこの書物もその後失われ、今日ではこれはただ断片的に

保存されているにすぎない。いま、わたくしたちがアナクシマン・ドロスに接しようとするとき、そのための重要な典拠となるシンプリキオスの書物は、このようにアナクシマンドロスの原著からはるかに隔つた非直接的なものである。アナクシマンドロス研究の困難はまず第一にこの点にある、と言えよう。

## —

シンプリキオスは『アリストテレスの自然学注釈』のかで、テオプラストスを参照しつつ、アナクシマンドロスについて次の如く述べている。

「アナクシマンドロスは、……ト・アペイロンが有るものらの始めであり、元素である、と言った、かれはアルケーのこの名前を最初にもたらして。で、かれは言つてゐる、それ「アルkee」は水でもなくまたその他の元素と呼ばれているものらのうちの一つでもなく、むしろ別な限りのない自然であり、そのものからすべての天たちとそれらのうちにある宇宙らとが生成するのである、と、で、有るものらにとって生成がそれらからであるところのものら、そのものらへと正当

に従つて「正当にも」消滅もまた生成する「消滅する」と、なぜならそのものは時の定めに従つて相互に不正の罰を受けまた償いをなすゆえ、とそういうふうにやや詩的な言辞でそれらのものを語つて。明らかに、かれは四つの元素の相互変化を観察してそれらのうちのなにか或る一つのものをではなく、それらを超えた他の或るもの、<sup>ヒヨコゲイジン</sup>基体<sup>ヒヨコゲイジン</sup>とすることを適切と考えたのである。そうしてかれは生成が行われるのは元素が変化するからではなく、永遠の運動によつて、相対立するものらが分離するからであるとしている。この故にこの人をアリストテレスはアナクサゴラスの仲間に配列したのであつた」。

この文章のなかでシンプリキオスは、「そういうふうにやや詩的な言辞でそれらのものを語つて」と言つてゐる。そのことから、先の文中にはアナクシマンドロス自身の言葉がシンプリキオスによつて引用されて、直接あらわれてゐる、と考えられるであろう。ではそのうちどれだけの言葉がアナクシマンドロス自身に帰せられるであろうか。シンプリキオスの引用の仕方は自分の文章と他からの引用文との区別をはつきりさせてないので、先の文章のなかか

のアナクシマンドロス自身の言葉を、一つの残された断片として、選び出されることは必ずしも容易ではないのである。従つてその点に関する諸学者の見解はまだ充分な一致をみていないのである。ディールス並びにクランツのテキストにみられるアナクシマンドロスの断片第一 (DK. 12B1) は諸家の見解のなかでは最も長い文章が選び出されていふものであろう。その選び出された断片は次の通りである。

*ἀρχὴν … τῶν δύνατων τὸ ἀπειλοῦν … … ξένον δὲ τὸ δικτυόν*

*τέσσερας εἰστι τοῖς οὐσίαις, καὶ τὴν φθορὰν εἰς ταῦτα*  
*γίνεσθαι κατὰ τὸ χρεόν, ὅπουτειτοντας τὴν αὐτὰ δίκριψιν καὶ*  
*τίσιν ἀλλήλοις τῆς ἀντικάσις κατὰ τὴν τοῦ χρόνου τάξιν.*

「ム・ト<sup>ア</sup>」〔限つだぬもの〕は有るのみのムのアルケー「始め」、……や、有るものムにとって生成がそれらのムであるといひのムのム、そのムのムと正当に従つて消滅もまた生成する、なぜならそのものらは時の定めに従つて相互に不正の罰を受けまた償いをなすゆえ<sup>ア</sup>。

右の断片をディールスは早い版では A 群 (testimonia) に置いて、アナクシマンドロス自身の言葉とするのにはな

お躊躇を表明しておられたけれども、それを“da Wörtlichkeit zweifellos”と脚注に記して、B 群(断片)に入れたのはクランツ(第五版)である。しかしそうだとして、ἀρχὴ以下を断片とするクランツの決定はディールスの見解に反して行われたものではなく、却つてディールスの意にそつて行われた決定であると言つてよいであらう。なぜかといふと、ディールスは晩年の論考 *Anaximandros von Milet* 1923 のなかでそういう考え方を次のようにならかに示してゐるからである。

「ギリシャ文献の」の畏敬すくよ古版本「アナクシマンドロスの『自然について』」を指す、そのなかからの若干の断片及び抜粋が現存しているのだが、それは次の如き記念碑的文章で始まっていた、即ち、万物の始めは無限なものである、という。その意義は二つ。一つには、始め (*ἀρχὴ*) といふ言葉は単に時間的始めを意味するだけではなく、またものの起源や本質をも意味しているのであり、従つてそれをわれわれは、ラテン語を用いる人々の訳語にならつて、原理と呼ぶのである。それゆえアナクシマンドロスは哲学を原理の学として把えたのであった<sup>ア</sup>。

また断片の *ξένον* 以下 *τάξιν* までの文章については、「」の哲学者の実の言葉はほとんど不变のまま保存されて

来ているとわたしは思ふ<sup>(2)</sup>、と述べ、ディールスは今日の断片集にみられるいの断章の訳語とはやや異った翻訳を示しているのである。従つて、今日ディールス及びクランツのテキストに見られるいの断片は、その訳語についてはフレンケル (Fränkel, H.) の研究を参照して改められたと思われる点があるけれども、しかしギリシャ語断片そのものは、ディールスの晩年の見解に基づいたものだと言つてよいであらう。

## III

しかし *ἀρχή* の語の使用をアナクシマンドロスに帰するいとは正当であろうか。この語の最初の使用をかれに帰するいによって、かれは哲学を原理の学 *Prinzipienlehre* と理解した、と結論することは果して許されるであらうか。アナクシマンドロスにおける *ἀρχή* の語の問題については、バーネット (Burnet, J.) とイエーガー (Jaeger, W.) との相対立する見解があるので、まずその両者の見解を参考しつ考察を進めたいと思つ。

アナクシマンドロスの断片のなかに *ἀρχή* の語を入れるか否かは先に引用したシンプリキオスの文章の次のよう箇所の解釈によつて左右されるであらう。

「アナクシマンドロスは、……ム・アペイロンが有るもののは始め (*ἀρχή*) であり元素である、と言つた、かれは始めのいの名前を最初にもたらして」 (*πρωτότος τοῦτο τοῦ νομία κομψάς τῆς ἀρχῆς*)。

もし右の文章が、「アナクシマンドロスはアルケーといふ語を初めて導入した」という意味に解され得るとすれば、いの語は断片の一部となることが出来るであらう。そしてディールス、クランツの断片決定はその点正しいとされるであらう。だがバーネットはそういう読み方に異議を申し是やみ、右に挙げた文章「ギリシヤ語の部分」の自然な意味は、he being the first to introduce this name (*τὸν ἀπειρονὸν*) of the material cause. であつて、いの名前とはム・アペイロンのいでありアルケーを指すのではない、と考えたのであつた。<sup>(3)</sup> そういう考えに対しイエーガーは、シンプリキオスのいの文章の意味は、しかし、いは、シムプリキオスのいの文章はアルケーといふ語を初めて導入した」といふのである、と言ふ。ただし、元素 (*στοργησίων*) いふ語はペリペトス学派の用語であり、テオプラストスによつて、*ἀρχή* といふ語を質料的原因として理解されるよう限定するために、付け加えられたのである、トイエーガーは言ふ。だがしかし、バーネットやイエ

イガーがそれぞれ自説を論証しながら挙げている古代の証言は決定的なものではない、と思われる。<sup>(6)</sup>

〔 Hippolytos, *Refut.*, I, 6, 2 : οὐτος μὲν οὖν (Anaximandros) ἀρχὴν καὶ στοιχεῖον εἴρηκε τῶν οὐτῶν τὸ ἄπερον, πρῶτος τοῦνομα καλέσας τῆς ἀρχῆς. [アホレ] の人はト・アベイロンが有るものらのアルケーであり元素であると言つた、アルケーの名前を最初に呼んで〕。

もしバーネットの主張が正しいとするならば、ヒポリュトスのこの文章は πρῶτος τοῦνομα καλέσας τὴν ἀρχὴν となつてゐるべきであろう。しかしヒポリュトスは τῆς ἀρχῆς という屬格を用いてゐるのである。これはバーネット説には不利なエヴィデンスのように見える。バーネット説に対するイエーガーの反論は右の如くである。この反論はマクダライミド (McDiamid) も言つてゐるよう、もしテオプラストスの原文に κομίδας 「あたらし」という語ではなく、ヒポリュトスにおけると同様、καλέσας 「呼んで、名づけて」の語が用いられてゐたとするならば、バーネット説への充分な反論となる。しかしテオプラストスの原典は失われてゐるので、その限り反論はまだ充分な反証を持つたことにはならないであろう。他方テオプラストスの原文においても、シンプリキオスと同様

に、κομίδας が用いられてゐたと考えてみる場合、問題は、そういう文章でテオプラストスが意味するところをヒポリュトスがどう解したかである。ヒポリュトスはその文章を、バーネットの読みとは異つた意味で、読み、「アナクシマンドロスはアルケーという名を最初に用いた人であった」ということ以外の他の解釈の余地のない文章でそれを表現したのである、トイエーガーは言つてゐるのである。<sup>(7)</sup>

しかし他面、ヒポリュトスという人はシンプリキオスがないし、ヒポリュトスの用いた語 καλέσας はいかにもペリバトス学派らしい語 κομίδας からの corruption であると思われるし、それにまたヒポリュトスによつて τοῦτο τοῦνομαから τοῦτο の削除が行われたということのほうが、その語が本来はなかったのに、アレクサンドロス (Alexandros of Aphrodisias) がまたはシンプリキオスによつて書き加えられたということのはうよりも、いつそうありうることである、とバーネットは言つてゐる。<sup>(8)</sup> バーネットはヒポリュトスの資料的価値を認めていない。τοῦτο がテオプラストスの原文にあつた本当のものであるならば、τοῦτο τοῦνομα は τὸ ἄπερον を指していれ、といふ

のがバーネットの主張である。しかしその点に関して、そうでなければならないと、文法的理由をバーネットは挙げておるが、バーネットは自分のほうがより自然な解釈であると語っているにすぎない」とイヒーガーは批評している。

論議の双方を比較するとき、エポリュトスの証言はバーネット説に対する反証となる可能性はあるけれども、しかしこれはイヒーガーの考える程決定的なものではありえないであら。

① Simplikios, *Phys.*, p. 150, 23: *πρωτος αὐτὸς* (*Anximandros*) *ἀρχὴν ὀνομάσας τὸ ὄποκείμενον*. [最初にかれ (アナクシマンドロス) は自らの基体をアルケーム名づけた]。

ハハプリキオスのこの文章は「アナクシマンドロスはアルケーの語を最初に使用した」ことを保証するかのようと思える。しかしバーネットは、この文章の意味は

ある。

イヒーガーのこの反論はしかしながら、カーラ (Kirk, G. S.) の語によると、<sup>30</sup> 説得力を持つてゐない。カクばりの動詞がしづかに specify as, identify as を意味するのを指摘してゐる。*ὀνομάζειν* ざつぱい (εἰπειν お伴へ) nennen を意味するのを知らない。例えは、*αρχαὶ τὸν ὀνομάζοντας τὸν ἀρχαῖ εἴπειν*. (Platon, *Prot.* 311e) ある。この用ひは、その意味は Einen Sophisten nennen

sie den Mann. (Schlemacher 訳) である。

「一ネットの読みの主張た点は、先にも述べたように、*τὸ ὄποκείμενον* を the substratum of the opposites としたところにあるであら。」一ネットの読みを検討するたゞは、「この点にいふと注目すべきである」と思われる。

アリストテレスの『自然学』(A. 4, 187 a 13) において、アリストテレスが *τὸ ὄποκείμενον* へじう語を用いて語っている箇所に注釈を行つてシナパコキオスは、「なる物體的なものとして、即ち *τὸ ὄποκείμενον* として、タレスの水を語っている。」シンプリキオスはアナクシマンドロスを語る前に、タレスの水を基体として語つてゐるのである。」とのことを見、一ネットの *τὸ ὄποκείμενον* = the substratum of the opposites への理解を否認するかの如くである。しかし事実はそうではないと思われる。アリストテレスは『自然学』(A. 4, 187 a 12 ff.)において、自然学者たちの觀方に二通りある、と語つてゐる。即ち、(1) 或る自然学者たちは基体である物体を一つであるとし、火とか空氣とか水とかのうちのどれか一つを基体として、他多くのものはこの一である基体の濃密化や稀薄化によつて生成する、と考えてゐるのである。即ち、これは或る一つのきまつた性質のものを基体として、そのものの量差

(濃密化と稀薄化) によって万物が生成するという考え方である。タレスやアナクシメネスはこの種の考え方の人である。しかるに、(2) 他の自然学者たちの方は、一つのものから「それのうちに」内在する反対なものらが分離する (*ἐκ τοῦ εὐός εὑρόσας τὰς ἐμαυτιάτητας ἐκρρίνεσθαι*) とする考え方、例えばアナクシマンドロスがそのような考え方である、と。

アリストテレスが右の如く自然学者たちの二通りの考え方を挙げてゐるのに関連して、特に後者の考え方に関して、シンプリキオスは『自然学注釈』(p. 150, 22–25)において、その考え方は分離によつて万物の生成を説くもので、もはや従来の考え方ではないとして、次の如く述べたのである。

「基体、即ち限りない物体のなかに、反対なものらが内在するのであって、それらが分離するのである、とアナクシマンドロスは言つてゐるのである。初めてかれ自らこの基体をアルケーと名づけて。といひで反対のものらとは熱冷乾湿などであるが」と。

シンプリキオスがここで基体 (*τὸ ὄποκείμενον*) と語つてゐるのは、性質的に反対のものら、即ち、熱冷乾湿などを内含した無規定的な一者であつて、それはもはやアリスト

テレスの言う第一の自然学者たちの考え方とは全く異った別な限りなき自然 (*εἰπερα τὸς φύσις ἀπερος*, Simplik., *Phys.* p. 24, 17) であり、第二の考え方のなかに初めて登場する新しい基体なのである。そういう新しい基体であるといふことにシンプリキオスの文章のアクセントはあるのだと考えられる。従つて、バーネットが *τὸ διπολεῖμαν* といひで特に限定して the substratum of the opposites としたことは肯定的なべき」とであると思われる。

それ故、第二に挙げたこの証言も「アナクシマンドロスはアルケーという語を最初に用いた」という読み方の保証にはなり得ないものである」とが明らかになつた、と言つてよいであろう。

### III Simplikios, *De Caelo*, p. 615, 15: *ἀπερον* δὲ

*πρωτος* (*Anaximandros*) *πρῶτον*. 「アナクシマンドロスは最初にアペイロンを前提した」。

この文章はバーネットの見解を支えるものだと思われぬ。

以上のように見てくるにあき、わたしたちは *ἀρχή* いう語の最初の使用をアナクシマンドロスに帰すに至りには、バーネット説に従つてそれを否定する場合によりもむと強いためらいを感じざるを得ないであろう。むしろわ

たくしたちは、バーネットの言つているように、<sup>(1)</sup> ハジのアルケーの語は全くアリストテレス的と考える方がよりよいのではないであろうか。テオプラストやシンプリキオスらその後の著作家たちはアリストテレスを踏襲しているのであるう。プラトンにはこの語のそういう使用は見られないるのである。

A・ルンペ (A. Lumpe) は *ἀρχή* の語義の歴史的展開を考察した論文において、イニーガーに従つて、この語がアナクシマンドロスによって用いられたことを前提し、アルケーの語義はそこではなお基本的に「時間的な始め」を意味するけれども、この語は「よつて一切のものが始まるものもの」に対して metonymisch [換喻的] に用いられている、と言つ。従つてこの語は未だディールスが考へた如き術語的使用のものではない。むしろ、後にアリストテレスによつてこの語に与えられた *principium reale* という意味における使用への *Ansatz* が、アナクシマンドロスにおいて見られる、とルンペは言つのである。ルンペはアルkeeの語をアリストテレス的意味への展開として把えてゐる。ルンペの考察は Metonymie という考え方を用いて一見説得的であるけれども、その論拠となる資料の取扱いでは、専らイニーガーに依つてゐるのである。翻つて考

えてみると、ルンペの考察は、この語をアリストテレス的使用の内部で意味づけ、それをあたかもアナクシマンドロスのものであるかの如く、かれに帰しているにすぎないかも知れないのである。

アナクシマンドロスがト・アペイロンについて語ったとすることを否定すべき理由はないであろう。しかしがそのものをアルケーという語を以って規定したということには、大いに問題があると言わなければならぬ。

#### 四

シンプリキオスは、自分の文章の中にアナクシマンドロスの言葉が直接引用されているということを、「そういうふうにやや詩的な言辭でそれらのものを語つて」という表現で示しているのだと思われる。そこで、アナクシマンドロスの言葉がその中に含まれていると思われるシンプリキオスの文章の構成を見ると、それは *λέγει* 「かれは言つてゐる」という語で始まり、*λέγων* 「語つて」という現在分詞で終つていて、即ち、この文章は、「かれは言つてゐる……を語つて。」という構成になつていて、「語る」という意味の言葉が二重に用いられている文章なのである。ギリシャ語の文章にはそういうふうに、*λέγει...*

*λέγων* と、いうような言表の仕方がまま見られるようである。例えは、わたくしたちはプラトンの文章のなかから次のような用例を見出せり」とが出来るのである。

*ἔπεισεντος μοι δοκῶ πρὸς τοῦτον λέγειν λέγων ὅτι*

... (*Apol.* 34d.)

「わたしはその人に対して……と語ればもとのことを語る」とになるやしょう」

*παῖδες τέ ποτε ἔρα λέγοντες φασι τὰ πάντα καὶ εἰδόθειν.*

(*Theat.* 181c)

「人々が万物は運動すると言ふとき、一体なにをかれらは語つてゐる（意味している）のか」ということ]。

右の一いつの用例からも察せられるように、文章が *λέγει* (*φασι*)...*λέγων* の構文である場合には、分詞 *λέγων* によって導かれる言葉は話者【*λέγει* の主語】が直接語る言葉であり、主動詞 *λέγει* によつて導かれる内容は、先の語られた言葉の解釈【意味】なり評価なりである。そしてその解釈や評価は、*λέγει* の主語となる人が自分で行うものであつたり、または、その人が *λέγων* 以下で何を意味したかを、別の人であるその文章の筆者が行うものであつたりするのである。また、例えはヘロドトス (Herodotus, III, 156, V, 36, 49) などに見られる *ἔρη λέγων* 「かれは語つてゐる

た」といふ pleonasm 「冗語法」は先のプラトンからの用例で見た場合の一種の変形とも考えられよう。直接引用される言葉の意味が誰れにとつても明瞭である場合には、それに解説が加えられる必要がないので、その場合には、*ἔφη λέγων* は単に一種の強調的な、修辞的な言葉のつみ重ねになってしまっている、と思われるからである。或はまた次のような文章もある。

*περὶ δῆτα λέγοντες διέβαθλουσι σιαβάλλοντες;* (Plat. *Apol.*, 196)

〔中傷する人々は一体何を語つて中傷していたのですか〕。

右の用例では、「語る」(*λέγοντες*)は「中傷する」(*διέβαθλοντες*)という語によつて規定され、より明確化されていると思われる。<sup>◎</sup>

さて、わたくしたちにいま問題となつてゐるシンプリキオスの文章においては、直接伝達されるべきアナクシマンドロスの言葉は、「そういうふうにやや詩的な言辞でそれらのものを語つて」(*αὐτὰ λέγων*)といふ表現によつて、指示されているのである。他方 *λέγει* という動詞によつて語られる内容は、アナクシマンドロスの言葉の意味について述べられているものであつて、直接的伝達ではないであらう。それは報告者「テオプラストス」のものである。で

は *αὐτὰ λέγων* の *αὐτά* 「それらのもの」という中性複数の代名詞は何を指してゐるであらうか。それはまず、内容的には、中性複数の名詞 *στοιχεῖα* 「元素」を指しているのである。しかしその *αὐτά* が直接明瞭に指しているのは、そのすぐ先にある語句、*διδόναται τὰ αὐτὰ δίτημ* 「それらのものは罰を受ける」の *αὐτά* である。そしてまたこの *αὐτά* は *τοῖς οὖσι* を指すかとも考えられるが、カーン(Kahn, C.H.)がアリストテレス(*Met.* 1014a27)を参照して「*ταῦτα τοῦτο γένος ἐστιν, σαφῆται καὶ φαίνεται*」と言えば、*ταῦτα* は *ταῦτα* の中性複数代名詞を指していると思われる。しかしこれらの中性複数代名詞を指していると思われる。しかしではなく、その一致は、*δῆταν δὲ δῆτε ...* 「明らかに」以下のシンプリキオスに帰せられる説明の文章を見て、初めてわかることなのである。従つて、そういう文章上の飛躍の如きものを考慮すると *αὐτὰ λέγων* が直接的に指し得る箇所は、一応 *δῆτα* 以下より *ταῦτα* の語までといふことになるであらう。ソリで、*λέγει* に始まり *λέγων* に終る文章を *δῆτα* を境に分けてみるはどうであらうか。この場合、*δῆτα* 以下は諸元素間の相互生成がテーマであり、その前の文章ではト・アペイロンからの天らや宇宙らの生成がテーマであるから、後半の文章内容についての解釈、説

明が *ἔξι ἀν* 以前の文章であるかといふとは出来ないのである。それより、*ἔξι ἀν* 以下 *τάξεων* がどの文章をよく見てみる。

*ἔξι ἀν δὲ γέγονεσθαις εἰστι τοῖς οὐσι, καὶ τὴν φύσην εἶται ταῦτα γέγονεσθαι κατὰ τὸ κρεῶν,*  
〔有る事の上にとつて生成がそれらからであるといふの上の〕  
〔その事のいくと正当に従つて消滅もまた生成する〕

ところの文章は

*διδόνται γὰρ αὐτὰ δίκηης καὶ τίσις αλλήλοις τῆς  
ἀδικίας κατὰ τὴν τοῦ κρονοῦ τάξιν,*

〔たゞやならそれらのものは時の定めに従つて相互に不正の罰を受けまた償いをなすゆえ〕

という後の文章と、或る仕方で、パラレールであり、また前の文章は後の文章の意味を、特に生成 (*γέγονεσθαις*) という観点から、解釈したものである、と思われる所以である。しかも、後の文章の表現は「詩的な言辞」と書かれるのに最もふさわしいであろう。従つて、*λέγει... λέγειν* の文章構造に着目しつゝ探し求めてきたアナクシマンドロスの言葉を、わたくしたちは、一応、右に挙げた後者の断章に限定して考えたいとが出来るのではないであらうか。即ち、*διδόνται* から *τάξιν* までを一応アナクシマンドロス自身の

言葉である、と。

## H

ところが、*ἔξι ἀν* 以下 *γέγονεσθαις* が何を断片からば抜へ考えば、バーネット<sup>(1)</sup>、ディールマイヤー (Dirmeier, F.)<sup>(2)</sup>、カーケ (Kirk, G. S.)<sup>(3)</sup> の手でに主張する所である。それに対して、その箇所をも断片に入れるときだとかねのは、ディールス、クランツを始め、ローン・フォード (Cornford, F. M.)<sup>(4)</sup> のである。またカーン (Kahn, G.)<sup>(5)</sup> は、この箇所をテオプラスースによく paraphrase つかひか、或は忠実な引用とするかを天秤にかけるとすれば、自分は後者の見解に傾くと思う、と言つてゐる。ローン・フォードによれば、テオプラスースは非常に簡潔な文体を用いる人であるから、普通ならば *γέγονεσθαι τὰ δύται* と書けば済むところを、おそれわざり *γέγονεσθαις εἰστι τοῖς οὐσι* と書くようなり。と、また *φύσησθαις* と書ければね、はやのところを *φύσην γέγονεσθαι* と書くようないとはないであらう、といふ。しかしの箇所は、*διδόνται* 以下 *τάξιν* までの最も確実に断片と考えられる詩的言辞を、生成の観点に立つて、直接ペラフレーズする唯一の文章なのである。そこでは、「有るものらが生成する」とじゅうよんに *τὰ ὄντα* [有る事の上]

が主語にならないで生成 (*réverσs*) が主語になっているのは、本稿第二章に引用したシンプリキオスの文章全体から理解されるように、全体を貫く問題が「生成」であるからであり、その観点に立つてパラフレーズが行われているからであると思われる。また単に「消滅する」 (*phēpeōtai*) とされず、「消滅もまた生成する」 (*καὶ τὴν φθορὰν γένεσιν σθαται*) と書かれていたのは右と同じ理由によるのである。消滅と言つても、アナクシマンドロスの考えによれば、それは相互生成の一環に他ならないことが、明瞭に説かれているのであると思われる。他方また、カーンの言つてゐるよう<sup>(5)</sup>に、この章句には rhythmic balance があるので、この文章の style そのものがこの章句を断片として考へるよう要求するかも知れない。しかしながら、*réverσs* 並びに *φθορά* を紀元前六世紀において術語的、プラトン的意味を有した語であったと考えることには、バーネットが注意している如く、無理があると思われる。ディールマイヤーはバーネットのこの意見に賛成し、これらの語は個々には、例えば *réverσs* はホメロスに、*φθορά* はアイスキュロス、ヘロドトスなどに用いられた、古い言葉であるけれども、*réverσs*-*φθορά* を一対の用語として考へることが出来るのはアリストテレスにおいてである、と言

つてゐる<sup>(6)</sup>。また、ヴラストス (Vlastos, G.) は特に *φθορά* の語が疑わしいと考え、この語について調査した結果、ソクラテス以前の学者たちのいかなる断片のなかにもこの語が抽象名詞としては用いられていない (デモクリトスの断片、DK, 68 B 249) に見られるこの語は明らかに別な意味である、と言つてゐる<sup>(7)</sup>。また、ペルメニデスは、イオニアの学者たちへのボレミクにおいて、かれらの用語法を反映しているけれども、そのペルメニデスが「消滅」を意味する語として用いているのは *ἀλεθηρος* (そして動詞は *ἀλλίκω*) である、とヴラストスは注意している。従つて、*réverσs* や *φθορά* の語が用いられているこの部分はアナクシマンドロスの言葉についての後世の解釈——特に *réverσs* を問題としながら行われた解釈——と考えらるべきであろう。やはりこの部分を断片に入れないとどうがより確かであろうと思われる。

次に *κατὰ τὸ ζητεῖν* [正当に従つて] と *κατὰ τὴν τὸν κρόνον τάξειν* [時の定めに従つて] との二つの語句について、わたくしたちは考へてみなければならぬであろう。というのも、*κατὰ τὸ ζητεῖν* の語句を断片として、バーネット、ディールマイヤー及びヴラストスらは認めているからであり、また他方、*κατὰ τὴν τὸν κρόνον τάξειν* をディ

ールマイヤーは断片からの削除を嘆くが、要するに「語句として採られ、他方 *κατὰ τὴν τοῦ ζωὸν τάξην*」が断片の語句として採られ、後者の語句にはアリストテレスやアオプラストスの表現と共通のものがあり、そしてこの語句は前者の語句についてのテオプラクtesによる解釈である」と考えられることがある。*τάξις* 並びに *ζωὸν* の両語は確かにアリストテレスに由来する用いられ (*κατὰ τὰ τὰ δῆλη τάξην ζωόν*, *Pol.* B 2, 1261 a 34), またシンペリキオペの『田獣詩注釋』においてもアカシヤンムロスの言葉が引用されてくる回<sup>1</sup>、「……の、やう上の箇所でハクノイントスに言及してい *τάξις τῷ καὶ ζωὸν* 云々」(11語は併せ用いられてゐる)。それらの箇所を指してヘルマイヤーは *κατὰ τὴν τοῦ ζωὸν τάξην* せ *κατὰ τὸ ζωόν* 云々とする、オプラクtes 云々なる、<sup>2</sup> ハクノイントスである、と考えるのである。その見方は今日ハルシャー (Hölscher, U) 云々で肯定され、またマクダーマド (McDiarmid, J. B.) 云々で <sup>3</sup> 認められてゐる。

しかしあくしたちは *τάξις* と *ζωόν* の両語の用いられ方が、ペリペトス派の場合と、アナクシメロスの場合

合とでは異つてゐることに注意しなければならないである。アナクシマノドロスにおいて「時の定め」が語られるに、特に注意すべき事柄は、カーキによっても言及されたりのように、時 *ζωόν* の personification である。また「定め」と訳した *τάξις* も「順序」とか「期間」という意味ではなく、(ア)ドニアの語の動詞形 *τάσσω* (anordnen, bestimmen) のリニアヌスがまだ強く感じられるのである。ハーバード以前には、*κατὰ τὴν τοῦ ζωὸν τάξην* は nach der Zeit Ordnung へ訳されていたが、Diels-Kranz の今口のトキスムでは、nach der Zeit Anordnung へ訳あひれてはやうべ理由は <sup>4</sup> 云々のやである。のりのりばば、*κατὰ τὴν τοῦ ζωὸν τάξην* へう語句が、後世の人の解釈上の表現ではなく、前六世紀のアナクシマノドロスの言葉とする可能性を増すといふのである。そして「時」ののよくな personification は、すでに早くハレンケルによつて觸及されていてゐる、アナクシマノドロスと同時代の人ソヨンの断片のなかの (Frag. 24, 3) は *ἄρκτη ζωόν* という表現にも見出されるのである。「時の裁きにおける」といふの表現においては、裁きを導くもの、裁きの執行者 (Vollstrecke der *άρκτη*) が「時」である。そしてまたソロノは他の断片 (Frag.

3, 16) 以上に、「正義」(*Δίκη*) と「時」(��) が結びつかない語である。時は正義としている、眞実をあたふかむのがソロモンの考え方であり、これはアナクシマニムロスにより、やがて再び意義深くとりあげられた思想である。ヒレンカルは言ってくる。以上の如く見てみると、わたくしたちは *κατὰ τὴν τοῦ ζηδόνων τάξιν* の語句を断片に入れよう考へる方がより自然であると思ふのである。語句が *κατὰ τὸ ζησῶν ὅπεραν* とヒレンカルであると解するには、やはり *λέγει... λέγων* の構文に注目していくべきだ。断片の解釈と逆に考えることである。詔め難いと思われ。むしろその文章上の位置から見ても、*κατὰ τὸ ζησῶν* の方こそがアハーネーズである。

アハーネズ、即ち *ζησῶν* との語はくわくなイトス(DK, 22 B 80) やペルメリヒス(DK, 28 B 2, 8) の断片中にも現れるのである。初期の哲学者たどりょうでやうに呼べる用いの語である。しかし、即ち *ζησῶν* の意味は自由的 (*sinnfrei*) な強制の「必然」(*ἀνάγκη*) と異なる。*Ζητ-*幹の語語の 10 例でも *ζησῶν* は Sollen, Schuldig sein, Gebrauchen, Brauchbar sein を意味するのである。従つて *κατὰ τὸ ζησῶν* はアナクシマニムスの断片のなかのただこれと平行的だ語句 *κατὰ τὴν τοῦ ζηδόνων τάξιν* の單なる語に換えて終るものではない。「それらのものは

keit (Schleiermacher) から Wie es in der Ordnung ist (Fränkel) から as is meet (Burnet) から nach der Schuldigkeit (Kranz) と記されるのである。因にまだ *Ζητ-* の語として最も最近次のよのな興味ある報告がなされた。即ち *Ζητ-* は objective である。それに似た意味の語 *ὅτε* は subjective であり、それは self-interest の要素を含み、それに對して後者は *νόμος* (law, decree) に近いのである。*Ζητ-* によれば、人は或る事柄を当然 (義務として) 能動的になまねばならないとするが表現され、*ὅτε* によれば、受動的に従うべきことが表現される。即ち *οὐ ζησῶν* は単なる必然の否定ではなく、スキティクス (Thucyd. III, XL, 4) にもその例が見られるように、不當 (not right) を意味するのである。右の如き注意! より、わたくしたちは *κατὰ τὸ ζησῶν* の意味すらといふが單なる必然性の主張におけるではなく、proper necessity のやあなりと、その文章上の modality は necessity と persuasion とが離れ難く一体にならうた性格のものやあなりとを知りとが出来る。従つて *κατὰ τὸ ζησῶν* はアナクシマニムスの断片のなかのただこれと平行的だ語句 *κατὰ τὴν τοῦ ζηδόνων τάξιν* の單なる語に換えて終るものではない。「それらのものは

## 六

相互に不正の罰を受け、また償をなす」というきわめて人倫的な命題のニュアンスをもまた同時に含み得てゐるのであらう。そのよだな語 *χρεῶν* は人倫的命題を自然学的命題へと、きわめて適切に解釈し移しゆくために巧みに用いられた語である、と思われる所以である。*χρεῶν* の語は初期の哲学者らによつて用いられた古い言葉であることは先に述べた。この語は、或は、アナクシマンドロスによつても用いられたかも知れない。それを否定する理由はどこにもない。しかしそういう語を巧みに用いることによつて、アナクシマンドロスの人倫的命題へと、アナクシマンドロスの宇宙論的思惟の概要にそつて、解釈し、移し行はうとしたのはテオプラストスであつたであらうか。

以上のような考察から、わたくしたちは、一つの試みとして、アナクシマンドロス自身の言葉と考えてよいと思われる断片を次のように限定してみる」とが出来るのではなないであらうか。

*διδόνται γὰρ αὐτὰ δίκην καὶ τίσων ἀλλήλος τῆς ἀδικίας κατὰ τὴν τοῦ χρόνου τάξιν.*

「だやだいやれのものは時の捉めに従つて相互に不正の罰を受けまた償をなすのであるか」<sup>9</sup>

(right) の意味に用いられてゐるのである。そのようにホメロスにおいてはディケーは未だ道徳的正義ではなかつた。例えば、『オデュセイア』(IV. 691) における *δίκη* は「道の口」(way, customary behaviour) の意味であり、同書 (XXIV. 255) の *δίκη* は「老人の」manner とか特權

試みに取り出した右の断片は何を語るものであろうか。翻訳では明瞭ではないが、原文は能動的文章である。「不正の故に」時の定めに従つて、相互に正義<sup>デイケー</sup>と償いとを与える。「正義を与える」(*δικην διδόναι*) という能動的ギリシヤ語熟語は翻訳において、「罰を受けた」という、あたかも受動的であるかの如き表現をとつてゐるだけであり、*τίσων διδόναι* も同じである。断片はそういう能動的表現によつて言表されている一つの人倫的命題である。この断片が自然学的生成の命題へと翻訳され、ペラフレイーズされたところ、能動的叙述的性格を持つ語 *χρεῶν* [正当] が用いられたのは全く適わしい」とあつたと思われる。

ところで、時の定めに従つて相互に正義を与えると言われる場合、その「正義」とは何であらうか。周知の如くホメロスにおいてはディケーは未だ道徳的正義ではなかつた。例えば、『オデュセイア』(IV. 691) における *δίκη* は「道の口」(way, customary behaviour) の意味であり、同書 (XXIV. 255) の *δίκη* は「老人の」manner とか特權

メロスにおいてはディケーは『マイリアス』(XVI. 388) や  
は Justice の意味にも用いられてはいたけれども、一般  
には、ガスリーの「言葉を借りれば次のよろこびに言われるであ  
る。On the whole however the *dike* of the gods  
contained as yet no necessary implication of moral  
righteousness: it was simply the way they chose to  
behave.」しかし、のディケー語義は、ホメロスの背景をな  
す王室（神授の）の没落と共に当然変化のを得なかつ  
た。「始めからすべての人はホメロスより学んだ」（クセ  
ノペネス）ことの反省が当然起らざるを得なかつたので  
ある。ボイオティアの貧しい農民の子に生れた詩人ヘシオ  
ドスの語るディケーは、いわば、弱者の強者に対する権利  
としての正義である。『仕事と日々』において、「他処者  
らにも土地の者らにも真すぐな正義を与える〔公正な裁判  
をする〕人々、そして正義の道からは離れない人々、その  
人々にはボリスは榮え民らはそいで花開く」(225—227)  
「おお王らよ、汝ら自らもまたこの正義を熟慮せよ」(248)  
といふ詩人は歌うのである。すでにヘシオドスにおいて、  
ディケーの名の許に「等しき権利」が要求されているので  
ある。また、アテナイの同朋に「善き法の支配する秩序」  
(*εργομένα*) を説くソロノもまたディケーについてかく語つ

ている。「ディケーは無言のうちに今の有様や以前の」と  
も知つていて、時とともに必ず報いを求めてやって来る。<sup>⑤</sup>  
と、そのディケーの顯現についてソロンは、「短い時がわ  
たしの狂氣をたしかに人々に示すであらう。示すであら  
う、中央に (*εσ μέσον*) 真実がやって来て」、と歌つてい  
る。ヒルツェル(Hirzel, R.)は次の如く述べている。  
「従つて裁判官の積極的な主要課題は諸党派の争いにおいて  
眞の言表を認識すべし」と、及びこのものを判決において  
自分のものとするにあるのであつた。——眞の言表、  
即ち本来的意味における眞なるもの *τὸ ἀληθές* というの  
は、それは實に語源的にはおおわれめんべつの (das nicht  
Verborgene)、自らの内容を公表してしまふもののことであ  
る」。アーティアと姉妹であるディケーはひたから  
眞実を見ようとする。そしてディケーは、それ故、やがて  
冷酷の性格を持つに至る。<sup>⑥</sup> ディケーはエリニユス「復讐の  
女神」とのみならず、まだ死の力とも等しくなる。アイス  
キヨロスの悲劇『供養する女たち』(306—314)におけるコ  
ロスの「おお偉大な運命らよ」に始まる舞歌はかかるディ  
ケーの終極の相を示している。*δράσσωντα παθεῖν*、「殺つた  
者はやられる」。ともあれディケーが時と共に来つて行う  
要求は、相争う両党にとって中央に眞実が來、眞実が公

平、平等に自由のめとで顯われるいじりやおほ。*δίκη* は *διέργυμα* (示す) に由来する。かかるディィケーの要求がリスの政治思想の上で実現をみたのは紀元前六世紀の中頃であると考えられる。エウノミアから發展した*ἰσότοπομέτρία* [法的平等] の思想がそれであらう。紀元前六世紀の中頃、サモス島の僭主ポリュククラテスの死後、その王笏と全權能とを委託されていたマイアンドリオスは、全市民の民会を召集して次の如く言つたと伝えられている。「……わたしはポリュククラテスがかれ自身に等しい人々を支配したのに不満であつたし、誰れであれ他の者がそんないふをするのにあ。さて、ポリュククラテスは今や自由の運命を完うしたので、わたしは主権を中央に (ἐσ μέσον) 置き、あなたがたにイソノミアを宣言する」と。[中央に] とはどういう意味であろうか。それはタレスからレキュデス宛の書簡 (Diog. Laert. I, 43—44) をみると、「公共のなかに」 () のことであることが察せられるであろう。

アナクシマンドロスの思惟の背後には、なにかいのようないふか。ホトベヌスはトナクシマンドロスの self-regulating equilibrium ホトベヌスが自然観に言及している。In Anaximander we can trace it back to its source in

the political assumption that justice was an affair between equals and that its settlement involved an equation of compensation to injury. トナクシマンドロスの断片の叙法的性格が全て能動的であることをわたくしたちは先に注意した。インノミアにおける等しき権利 [力] の要求はディィケーの実現である。そして、権利 [力] は本来他から与えられるものではなく、ポリスの構成要素たる個人個人が本来等しくそれであるところのものである。正義として時はただ自ずとその真実を顯わすだけである。従つて、「相互に正義を与え合う」という能動的表現のなかに、わたくしたちは、国家構成の元素としての個人が、他に強制されてではなく、自然に、自動的に、自己実現として国家にかかる仕方のギリシャ的表現を見ることが出来るのではないであろうか。それはきわめて特異なことであると思われる。ブッチャー (Butcher, S. H.) は言つてゐる。「ギリシャの一般意識にとっては、國家或は都市は組織ではなく有機体であった。生命のない統治機関ではなく、市民にのしかかる異質の力でもなく、あらゆる個人の意志を自らの内に包摂する生きた全体、自発の活力を阻みもせず個人の成長を挫きもせず、その包含する個性を豊富にしました完全にして

ゆく全体であった」。「相互に正義を与えること」とは中央に、公共のなかに主権が置かれ、誰れか一人がそれを占有してしまわないことであり、各人が互に権利「力」としての自己を実現し合うことである。個体相互の力のかかる均衡が正義であるように、時の相下にある一切の有るものらにとっても正義は個物相互の力の均衡である。

イソノミアの自然学的表現は、グラストスによつて指摘されてゐるよう<sup>(1)</sup>、アルクマイオンの医学思想に端的に見られる。アルクマイオンは言う。「健康を保持するものは湿乾冷温辛甘などの諸々の力のイソノミアである。他方それらのものにおけるモナルキア〔独裁〕は病氣を作るものである」(DK, 24 B 4)、と。

アルクマイオンのかかる自然学的考察はアナクシマンドロスの self-regulative equilibrium としてのそれがあつてはじめて可能となつたのではないであろうか。アナクシマンドロスの自然研究(*περὶ φύσης ἀττικά*)の視点は、かれの言葉と考えられる先の断片にあのように、やや詩的な言辞で表現されていると言ふことができるのではないでありますか。かれは幾何学的平等と均齊とによって宇宙像を画いたと伝えられるが、それは諸宇宙間のイソノミアの表現であり、ディケーの思想はここにもあらかじめ予想され

なければならぬ。アナクシマンドロスにおいては、人倫的世界の原理は自然的世界の原理に先立つ、しかもそれと共通である。断片における「なぜなら」(*τίποτε*)の語はその証言である。

アナクシマンドロスによつて始めて書かれ、ミレトスのヘカタイオスによつて修正された世界最初の地図もまた人倫的世界の原理が先であり、しかもその原理は自然的世界のそれと共通であることを物語つてゐる。地理学者アガテメロスは言つてゐる。「さて古人たちは人の住む大地を円く描いた。ヘラスをまん中におき、そしてデルポイをヘラスの中心にして、というのもヘラスは大地の臍を持つてゐるから」<sup>(2)</sup>、と。この地図では大地は「デルポイを中心にして」まるでコンパスによるかのよに円く描かれ、その周囲をオケアノスが流れている、そしてアジアをヨーロッパに等しくしている。とヘロドトス(Hdt. IV, 36)は報告している。アナクシマンドロスは地図を制作するにあたつて、ポリスの精神的原理をそのまま地図の上に表現しているのである。当時全ギリシャにあつて独立的な多くの都市を導く者はデルポイの神であった。そのアポロンの名は、アナクシマンドロスがその建設指導者(*οἰκουστής*)であった植民都市の名にも用いられたのであった。

アナクシマンドロスによつて構想された宇宙像の基礎をなす幾何学的平等、諸々の力の均衡の思想は単なる知的・技術的達成ではなく、それを可能ならしめた一つの視点、一つの母胎として、背後にティケーの思想をわたへしたちは予想しなければならないであらう。アナクシマンドロスの言葉と考へるにやむなし、先にとり出された一つの短い断章は、恐らく、アナクシマンドロスの宇宙論的思惟の枢要をなすものであつたと思われるのである。

(本学講師 指導)

- 註
- ① ハギニス (希) 『年譜』 (Chronica) はアリストテレスの『年譜』 (Diogenes Laertios II, 1) の報道。DK. 12A 1.
  - ② DK. 12A 3.
  - ③ DK. 12A 1, 6.
  - ④ DK. 12A 1.
  - ⑤ DK. 12A 1. ただし Diog. I. の報告ではアナクシマンドロスがヘーリアの最初の発明者ではないとするのが、Herod. II 109 の記述を参照すれば、Diog. I. の報告が信頼性がなきればがわかる。しかし Suidas (DK. 12A 2) の記述の如くアナクシマンドロスはヘーリアを導入した、もしくはその改良者である。古代の歴史にはヘーリア (H. Diels) 『古代技術』 (Antike Technik 1924) (邦訳、平田寛訳、昭和一八年、四十五年の) の第七講参照。
  - ⑥ バンコリトの日時誌「半球」はギリシャで改良された天球儀に

ないだ、ハムヌス。

- ⑦ DK. 12A 2 にみられるペイダスの記述、並びに DK. 12A 1 と Diog. I. の記述を参照。
- ⑧ Simplikios: Phys. p. 24, 20.
- ⑨ 注⑦参照。
- ⑩ 古代ギリシャにおいて、書物が人々の手に普及するようになつた時期は、およそ前六世紀から前五世紀の轉回期乃至は前四世紀後半にかけてである。Lesky, A.: Geschichte der griechischen Literatur. 1963, S. 16 著者 Artemis は Lexikon der alten Welt. 1965, S. 462) しかし詩じみ、他の文芸作品にせよ、それが書物として書き下されねばならぬこと、長い間發表の普通の仕方は口頭にせよ、やがては書物はそのための「心憶え」 (メモリヤー) であつた、これら事情をこの際考へ併す。The Oxford Classical Dictionary. second edition, p. 173 参照。
- ⑪ Gigon, O.: Der Ursprung der griechischen Philosophie. 1967, S. 44 など Guthrie, W. K. C.,: A History of Greek Philosophy I. 1962, pp. 72, 73. 参照。
- ⑫ Simplik.: Phys. p. 24, 13—25.
- ⑬ Diels, H.: Kleine Schriften. S. 3.
- ⑭ Diels: op. cit. S. 4.
- ⑮ Diels-Kranz: Fragmente der Vorsokratiker I. S. 89 の註注、並びに Fränkel: Wege und Formen frühgri-

- chischen Denkens*. 1955, S. 188 間接論。
- (16) Burnet, J.: *Early Greek Philosophy*, p. 54 朝鮮社。
- (17) Jaeger, W.: *Die Theologie der frühen griechischen Denker*. 1953, S. 231, (Eng. ed. *Theology of the early Greek Philosophers*. 1947, p. 201).
- (18) ヤク・ヤトムツ (McDermid, J.B.) 朝鮮社 Theophrastus on the Presocratic causes (*Studies in Presocractic Philosophy*. Vol. 1, ed. by Furley and Allen 1970. 韓国) p. 188 ff. 朝鮮社。
- (19) McDermid: op. cit. p. 188.
- (20) Jaeger: op. cit. S. 231.
- (21) Burnet: op. cit. p. 54.
- (22) Burnet: op. cit. p. 54 and p. 36.
- (23) Burnet: op. cit. p. 55.
- (24) Kirk, G. S.: Some problems in Anaximander. 1955 (*Studies in Presocractic Philosophy*. vol. 1, ed. by Furley and Allen 1970) p. 326.
- (25) Simplik.: *Phys.* p. 149, 5—7.
- (26) Burnet: op. cit. p. 11.
- (27) Lümpel, A.: Der Terminus „Prinzip“ (*ἀρχή*) von den Vorsokratikern bis auf Aristoteles (*Archiv für Begriffsgeschichte*. Band I, 1955) S. 104 ff.
- (28) Passow 朝鮮語辭典第1[船築] 1卷(1) ○ 朝鮮語の翻訳 Anaximander and the beginnings of Greek Philosophy 朝鮮語の翻訳 Furley and Allen 編 *Studies in Presocractic Philosophy*. vol. 1, p. 281 朝鮮語の翻訳。
- (29) Kahn, C. H.: *Anaximander and the Origins of Greek Cosmology*. 1960/64, p. 167.
- (30) Hölscher, U.: *Anfängliches Fragen*. 1968, S. 11.
- (31) Burnet: op. cit. p. 52.
- (32) Dirlmeier, F.: Der Satz des Anaximandros von Milet (VS 12 B 1) 1938 (*Um die Begriffswelt der Vorsoziatiker*. hrsg. von Hans-Georg Gadamer, 1968) S. 88 ff.
- (33) Kirk, G. S.: *The presocratic philosophers* 1960. pp. 117—8. Some problems in Anaximander, 1955 (in *Studies in Presocractic Philosophy*. vol. 1, ed. by Furley and Allen) p. 340 ff.
- (34) Guthrie, W. K. C.: *A History of Greek Philosophy*, 1, 1962, p. 77. Kahn: op. cit. pp. 177—178.
- (35) Kahn: op. cit. p. 173.
- (36) Kahn: op. cit. p. 173.
- (37) Burnet: op. cit. p. 52.
- (38) Dirlmeier: op. cit. S. 89.
- (39) Vlastos, G.: Equality and Justice in early Greek Cosmologies. 1947 (in *Studies in Presocractic Philosophy* vol. 1.) p. 73.
- (40) Dirlmeier: op. cit. S. 92—93.
- (41) Hölscher: op. cit. S. 27. (朝鮮語の翻訳 Anaximander and the beginnings of Greek Philosophy 朝鮮語の翻訳 Furley and Allen 編 *Studies in Presocractic Philosophy*. vol. 1, p. 281 朝鮮語の翻訳)。
- (42) McDermid: op. cit. p. 194.
- (43) Kirk: Some problems in Anaximander. p. 345.
- (44) Fränkel: op. cit. S. 188.
- (45) Diels: op. cit. S. 4.
- (46) Fränkel: Die Zeitauffassung in der frühländischen

- Literatur (in *Weg und Formen frühgriechischen Denkens*). S. 9.
- (47) Fränkel: Parmenidesstudien. S. 188.
- (48) Schleiermacher: Über Anaximandros. 1811 (Schleiermacher's *Sämtliche Werke*. III, 2. 1838). S. 186.
- (49) Mourclatos, A.P.D.: *The Route of Parmenides*. 1970, p. 277.
- (50) Guthrie, W. K. C.: *The Greeks and their Gods*. 1950, p. 143.
- (51) Solon: Eleg. 4
- (52) Solon: Eleg. 11
- (53) Hirzel, R.: *Themis, Dike und Verwandtes*. 1907, S. 108.
- (54) Hirzel, R.: op. cit. S. 147.
- (55) Sinclair, T. A.: *A History of Greek Political Thought*. 1961, p. 33.
- (56) Herodotos, III, 142.
- (57) Vlastos, G.: op. cit. pp. 82—83.
- (58) Butcher, S. H.: *Some aspects of greek genius*. 1891, p. 51 (邦訳『ギリシャ精神の様相』田世秀央、和辻哲郎、寿岳文庫五一<sup>九</sup>—<sup>一</sup>。古用は同書訳文による)。
- (59) Vlastos, G.: op. cit. p. 57 ff.
- (60) Kahn: op. cit. p. 82 参照。

左記の論文は昭和四十一年度および四十二年度文部省科学研究費補助金による総合研究「ギリシャ思想とイラン思想との比較哲学的研究」において筆者が「ギリシャ自然哲学の研究」という研究分担課題を与えられ、三井浩、金松賢諒両先生の御教示を頂いたが、着手した研究の一端である。本稿ではアナクシマノスのユ・トマヨハにひいて、またかの宇宙論についてには触れぬじゆが出来なかつた。他日稿を改め考察した。